

駅裏

田村 素子

店の外で、はたはたと雪を払う気配がしたあと、間なしに客がひとり入ってきた。

壁際に、四人がけのテーブルが二卓だけ置かれたその席で、戸を開けた客がよく見える位置に荒井は座っている。

客の様子で、カウンターへ移るかどうかは、ここ暫く通っていた間に、荒井にも分かってきた。家族連れだとか女性たちだと、荒井は席を譲ってカウンターへ移る。

九時過ぎ、客が途切れた時分に入ってきた女客を、あるじは、

「よっ」と、小さく言っただけで迎えた。

荒井が夕刊から顔を上げたのは、少し前、

「今夜は荒井さんでおしまいみたいですね」

「この雪だから、みんな帰りを急いでるんでしょう」 そんなことを、あるじと話していたからであった。

客は外で払い切れなかった雪を、遠慮深くもう一度はたいてから、隅のコート掛けのハンガーに吊るしている。

荒井は思わず夕刊を横へどけた。いくらか酔った目に映ったコートの色が、ある記憶に繋がってはつとしたのだ。

この色の好きな、加奈という女と関わった過去がある。

ダークグリーンの生地に、襟と袖口を黒で縁取りしたデザインは、少女じみていたが加奈にはよく似合っていた。

色もデザインも、加奈が着ていたのとそっくりなコートが、荒井の席から見える所に掛かっている。

あの頃、加奈は荒井に逢うとき、いつも同じコートばかりを着ていた。

付き合いに氣の重くなりかけた時期、一度だけ言ったことがあった。

「コート、そればかりだね。たまには別のも着てみたら?」

「荒井さんに逢う時はこれに決めてるの」

そのとき、少しはに自分でいた加奈のことも、一緒に行つて逃えてやったコートのことも、たつたいままで忘れていた。

小柄で細身の体つきが加奈に似ている客は、カウンターに頬づえをして、あるじのすることをだまつて見ている。特別な注文をすることもなく、あるじに任せてほつと肩の力を抜いているようにも見えた。

「いつもの」と言つただけで通じるなじみ客が多い店らしく、素朴な惣菜が主になっている品書きが、むかし風の筆跡で壁に張られているのも懐かしい感じがする。

汁物はきつちりと熱く、小さな添物にも、さりげない気くばりがしてあつた。

荒井がここで出会う客の多くは、いろんな事情があつて、家に夕食の仕度が出来ていない男たちなのである。つ。

ほとんどの客は定食だつた。

角皿に載せた焼き魚に、きりつと大根おろしが添えてあり、魚によっては、種類の違う野菜の煮びたしをつけてくれたりもする。

仕事帰りに軽く飲んで、ついでに夕飯も済ませてしまつ男たちには、柔和なあるじは気が休まるのか、出されたものをだまつて食べ、ときおり、自分の酒をあるじにもすすめて、二つ、三つ世間話をして機嫌よく帰つて行く。

カウンターは、五、六人がせいぜいだつたから、新参者の荒井は、自然、テーブルの席へ座ることになつていた。

下拵えは、無口なおかみさんの仕事だつた。ほとんど奥の洗い場において、あるじの言つとおりに動いている。

食器を下げるのも洗つのも静かな人で、客の出入りの様子次第で、店の近くにあるらしい家へ、あるじにだけ解る言葉を残して、裏口の戸をそつと閉めて帰つて行く。

今夜もそうであつた。

人影は店の前を通り過ぎて行くだけだ。

「静かに降る雪つて、なかなか止まないもんですねえ」

ひとり残ることに慣れた声である。

おかみさんが帰つた、洗い場の窓にあたる雪の影を見ながら、あるじが呟いたときに、

その客は入ってきたのだった。

頭の、払い切れなかった雪がとけて、首筋で切った髪が光っている。

「どうしていた？ みきちゃん。しばらく顔を見せなかったじゃないか」

注文も訊かず、仕事に取り掛かりながらあるじが言った。

「急だったから小父さんに知らせる間がなくて。暮れに行った時は、憎まれ口きいていたし、まだまだ大丈夫と思っていたんだけど、とうさん死んじゃったの」

あるじが驚いたように目を見張り、それから、小さくうなずいた。

「あんな人だったから、めんどろな事が多くて後始末が大変。十日も旭川にいてしまったわ。この雪だし、もう店じまいかと思ったけど、小父さんのご飯が食べたくて来てみたの。」

「ごめん、小父さん」

「いいんだよ。そうか、お父さん亡くなったか。奥さんに先立たれてからずいぶん荒れて体こわしたもんな。入院暮らしも長かったし、お父さん、自分でこのへんと幕引きをしたのかもしいよ」

手は休めず、あるじはしんみりと言った。

味噌汁は豆腐と油揚げらしい。いい匂いが店の中に立ち始めた。

「姉たちは、あんな道楽した人に、人並みな葬式なんかしたくないって言っつ。とうさんの年金は少なかったし、借金も残っていたし、この何年かはみんなの負担になっていたから無理もないけれど、死んじゃった親に敵しすぎるって、わたし喧嘩しちゃった」

あるじはうんうんと頷いて、魚の焼け具合を確かめながら、ひと通り、娘のような客の話を聞いてやっている。

「親って、いつかは先に死ぬものなんだけれど、そう思っているも死なれりゃ辛いよね。」

あんだ、何も教えてくれなかったから、風邪でも引いたかと案じていたんだよ。折りをみて小父さんもお詣りさせてもらおうな。さあ、出来た。汁、熱いよ」

みきと呼ばれた客は、三十才には少し間がありそうに見える。

カウンターに並べてもらった定食を嬉しそうに眺め、パチ、と音立てて箸を割った。

あるじと交わす言葉遣いと同じように、箸を持つ指の形が幼げだ。

おいしい！ と汁をすすって、あとは黙って熱心に食べている。

久しぶりに来たらしいなじみ客を、あるじが穏やかな目で見ていた。

「とうさんへ仕送りが終わったら、どんなに楽だろうと思ったこともあったけれど、死なれてみると、そんなことを一度でも考えたわたしは、罰あたりみたいで気持ちが悪いの」
空腹が治まったのか、調理台のあたりを静かに片付け始めた、あるじの背中に向かってみきは話しかけた。

「正直なんだね。そう思ったって罪でなんかありゃしないさ。俺なんか、親に小遣いさえやらなかった。そのうちと思っっているうちに死んじまって。あんたは上出来の子だったよ。仕送りの大方を受け持っていたんだからね」

「もう、あんな姉たちとは付き合わないわ。とうさんがあっちにいたから頼っていたけど、地元なのにあまり行ってくれてなかったようなの。だから、せめてお葬式はかあさん並みにしてほしいのに、二人とも、わたしの言うことをきいてくれなかった」

親の死で、姉妹の間に生じたわだかまりを、腹立ちを抑えた口調であるじに訴えている。
「姉さんたちには家庭があるし、思うようにはいかなかったんだ。お父さんだって分かっていたろうし、だから、あんたのことは特に感謝してははずだよ。姉さんたちだってそう思っていたのと違うかい？」

みきを、やんわりなだめて、荒井が半分だけ残してあったコップの酒に、あるじはちらと目をはしらせた。

「せっかくの息抜きの時間に、湿っぽいことお聞かせてお勘弁してくださいよ。この娘と同じ土地の出なものですから……。お詫びというのもなんだけど」

カウンターを廻って、あるじが盆に載せた銚子を、荒井のテーブルへ運んで来た。

「わたしが悪いんだわ。あっちにいる間、ちゃんとした物を食べてなかったから、駅を出たら足が自然に小父さんのとこ向いちゃったの。ごめんなさい、お客さんのお邪魔をして、みきが素直に荒井を見て頭を下げた。

「いいですよ。旨いものを食べさせてもらって、新聞を読み終るまで居座っている、我儘な客なんですから」

どんな仕事をしているのか、みきは顔たちの優しさに似合わない荒れた手をしていた。

地下鉄の駅から歩いて二、三分の裏通りに飲食店が軒をならべている。それほど酒が好きでない荒井は、めったに足をむけなかったが、地味な店構えに惹かれて、この店の戸を開けた夜から十日ほどが過ぎていた。

あの夜、荒井を迎えてくれたあるじの声に彼はほっとした。人は初めての店に入ったとき、何がなしの不安を持つものだが、作りものでない情のある挨拶をしてくれたのだ。

しばらく遠ざかっていた煮物や、揚げたての天ぷらを出してもらった荒井は、それ以来、灯りの点つていない家へ帰るのも大儀ではなくなっている。

兄が、勤め先の健康診断で、糖尿の初期と診断されたのをきっかけに、

「おやじを、しばらく家であずかってやりたいけど、いいかな」と言った荒井へ、取り付くしまのない断り方をした妻の明子は、実家へ戻ったまま二週間ほど経っても、電話一本かけてよこさなかった。

高校受験の子と、病人食を作らなければならない長男の妻にとって、自分は重荷だろうと思っている、父の気持ちが荒井にはよく分かるのだ。

だから、兄たちに代わって父を家に引き取りたかった。

「派手な披露宴はいやだ、と言っあなた 의견をきいたのも、旅行だってあんなところで済ませたのも、あなたが二男だから我慢したの。あちらの家は立派だし、建てたのはお義父さんなんですから、そこに住んでいる人たちが面倒みるの当たり前よ。あの人たちには何ひとつお世話になったことないわ」

そのとおりなのであった。

だが、《あの人たち》と、他人のよつな言い方をされれば、妻の普段の優しさは、事の起きないときに限られたものだったのかと、荒井は憮然として明子の言い分を聞いていた。「何もあなたの方から言い出さなくても、ほんとうに困ったら、あちらから頼んでくるでしょうよ」

「義姉さんはそんなことを言っ人ではないよ。おふくろが死んでからずっと、おやじのことで兄貴にこぼしたりしなかつたらいいんだ」

「ご立派なのは分かっています。でも、私はお義姉さんと違っの」

母が亡くなってから五年ちかくを、兄夫婦は黙って父の世話をしてくれていた。

家にしても、明子が羨やむほどのことはなく、ごく普通の二階建てのものだった。

子供のない荒井たちなのだ。一時的に夫の親と同居することが、実家へ戻ってしまうほど、耐え難いことなのであろうか。

老人と、食生活に手間のかかる夫を抱えた嫂に、少しも同情しない妻を、荒井は別人をみたよつな思いであった。

穏やかだと信じていた性格は、火の粉が自分に降りかかってきそつになれば、冷淡に払

いのける裏も併せ持っていたのだ。

(戻ってこなくていい、俺の親だ。一人でがんばってみるさ)

荒井は、けなげに親の死と向き合って、あとの始末もしてきたというみきの横顔を見ながら、妻を当てにしない父との暮らしを考えてみた。

「ごちそうさまでした。こんなおいしい夕飯は久しぶり」みきが箸を置いた。

「お茶を飲んだら早く帰りなさい、部屋が冷えてなきやいいけど」

店の名の入った急須に、熱い湯を注ぎながら、あるじが言った。

「大丈夫、わたしの部屋二階だから、西隣りと下からもあつたかみがくるの。でも今度は十日もあけたからちよつと心配。ストーブつけてしばらくそのコート着てるわ」

入ってきたときは別人のような表情で、彼女はハンガー掛けに目をやった。

釦まで、加奈のものと同じに見えるコートを、荒井はさっきから何度も眺めている。

「姉たちと喧嘩したり、厭なこと多かつたけれど、不思議な縁でコートを貰っちゃった。

軽くてとても暖ったかいの」

「みきちゃん童顔だから、その色よく似合うよ。親類の人にも貰ったのかい？」

「人に物をくれることのできる親類なんかいないわ。とうさんが死んで、みんな、やれやれと思ってるんだもの」

二人のやりとりに、荒井は耳をすませてしまつた。

雪の夜、駅裏の店で出会った娘は、三年前、荒井から去った加奈が着ていたものと、そっくりなコートを着て現れたのだ。ミキにコートをくれたという女性を荒井は想像してみた。夢のような偶然に人はたまに出あうことがある。

あるじの好意の酒が、まだ、銚子一本残っていた。

「失礼！」荒井は銚子を持って立ち上がった。

いつもより酔っているのが分かったが、荒井は酔いにまかせて、みきが、どんな女性から、どんな所でコートを貰ったのか、そのいきさつを聞いてみたかった。

加奈は荒井の勤務先の売店に、パートとして三人の間人たちと働いていた。

おとなしく、笑顔を絶やさない加奈は、独身の男たちの気持ちを騒がせたが、母と娘の暮しのせい、仕事が終わると真つ直ぐ家へ帰る生真面目さだったから、自然、男たちも加奈には距離をおくようになっていた。

加奈が、荒井に親しみをさせたのは、死んだ父の姿を荒井に重ねたからだ、二人が人目を恐れることになったあと、申し訳なさそうに彼女は笑って言った。

加奈の控えめな愛情は、父も役所勤めであったし、荒井の立場をよく分かっていたからであった。

あの頃、役所のあちこちで起きた不祥事は、加奈との隠れた付き合いにも不安をもたせることになった。

小さくても、肩書きのついている荒井に、加奈の存在はマイナスになる。

加奈は、たまに荒井が買物に行っても、目を合わさず知らぬふりを通すほど、回りには氣を遣ってれていた。

そんな加奈が、荒井のために表立つことを恐れて別れを言い出したとき、荒井の気持の中は、すまなさより安堵感のほうが強かった。

親子に近い感情で自分を慕っている加奈なのだ。しかし、発覚すれば、よくある情事と同じ扱いにされるのは間違いなかった。

このご時世に、安泰な職場を女のことと問題になるのは避けたかった。

彼は自身の心の動きに驚きながら、だが、それほど日をおかずに、加奈への愛情も、すまなさも薄れていった。自分に都合のいい話に言葉少なく頷いて、荒井は素知らぬ顔で親子との平穏な家庭へもどった。

加奈がどんな気持ちで自分を見たかを、荒井は推しはかることをしなかった。

役所での立場を考えたり、加奈とのことに倦んでいただけではなかったからだ。

妻を亡くした父を、子供として、たまには自分の家に連れてきてやりたかったが、明子の協力がなければ叶わないことであった。

そのためにも、加奈の存在を知られてはならない。加奈はまるで荒井の心を読んだようなタイミングで、別れを言い出したのだ。

幸いにも、これまで兄の家は平穏に過ぎていたし、嫂の物事に拘らない性格は、父に幸福な晩年を送らせてくれていた。

荒井は時々、嫂への感謝もこめて、いい酒をみつけたときなど父の顔を見に行った。

しかしいま、父は病気の長男のために、好きな酒を控えているはずであった。

家族に何かが起きれば、老いた人は身の置き所がなく寂しい境遇になってしまふ。

「資格を持った職業につきたいと思って」

役所の売店を辞める理由を、加奈は素朴に言った。

「ひとりっ子だから、母をみていかなければならないし、いまの職場は時間給だから将来が不安でしょ。母が元気でいてくれるうちに、きちんとした資格を得ておきたいの」

その資格がどんなことなのかを、荒井は訊いてみることをしなかった。

自分から言い出さないで済んだ別れが、ありがたかったし、父に来てもらうには、明子に隠し事をしてはならなかった。

だが、いまとなってみれば、荒井の思惑などはよそに、明子は荒井の身内に深く関わることなど、最初から考えてもいなかったと思う。世間的な義理を果たすことはきちんとするが、明子は荒井の実家へ、足を向けることは少なかった。

日常生活で、明子の潔癖さは荒井を辟易させることも度々だったから、たとえ、夫の親でも男の老人と暮らすことなど、明子には我慢のならないことに決まっていた。

今度、荒井が父の引き取りを撤回しなければ、両親と未婚の妹だけの実家が居心地よく義父を引き取ることになり兼ねない家へ、明子は帰る気持ちにはなれないであろう。

三年前、加奈が言い出してくれた別れを、ほっとした気持ちで聞いた日のことを、荒井は苦く思い出していた。

男は、保身のために打算も狡さも恥と想わないことがある。

「大変だったようですね。つい、聞いてしまいましたよ」

荒井はみきの横に立って、まだ片付いてない盆に載っている、小さなコップに銚子の酒を注いだ。

「いいの？小父さん」

みきが、不安そうにあるじと荒井の顔を見て言った。

「いいさ、お客さんのおごりだもの。いただきなさいよ」

「おごることになるのかな」と彼は笑った。

「本当を言えば飲み切れないんですよ。このところ、いくらか手があがってきたのですが、荒井の酒量はすでにこえている。」

「いつも、この娘に飲みすぎるって言うんです。でも今夜は一杯だけだったし」

「厭だ、お客さんに凄いと思われちゃう。冗談言ってるんですよ小父さんは」

あるじをにらんで、みきはコップを取り上げ、荒井に笑顔を向けた。
「この娘は働きに疲れたとき、つましい暮らしの息抜きに、同郷のあるじの店へ来るのであろうか。」

「金のないとき、五百円玉で足りるからよく来るんです、なんでも旨いし」
いつか隣り合わせた若者が、笑いながら話したことがあった。

（そうだ、これからはなるべく早く帰ろう。昼の間はおやじに出来ることをしてもらって、夕飯は時々ここへ連れてくればいいんだ）

遠慮深く、兄夫婦と波風を立てずにきた父であった。

荒井は、このところ、父と親子らしい会話もせず、酒の相手もしていなかった。

明子の不在を、なるべくなら兄の一家には知られたくなかったから、電話をするのも躊躇っていたのだ。しかし、もう限界だろうと思う。

みきが終わりの客だった店の看板の灯りを、あるじが消しに立った。

「小父さん、信じられる？ 初めて会った人がこんな上等のコートをくれるなんて」

「なんだか分からないけど、あんたが現に着て帰ったんだからあることなんだろ」

看板の灯りが消えると、駅裏らしく、にわか到店の中の明るさも薄れた感じになった。

「何度も断ったの。いくらとうさんを知ってた人でも、そうですかって貰ってしまうのも厚かましいことでしょうっ」

「世の中にはそんな事もあるもんさ。あんたがいい娘だから、神さんがご褒美をくれたんだよきつと」

「ご褒美かなあ」

善良そうな表情がくずれた。

「このコートの持主だった人、とうさんが死んだ時そばに居合わせてくれた介護士さんなの。とうさんの特養ホームで、介護士さんとして勤めてからまだ日が浅かったそつだけ、偏屈で通ってたとうさんが、ホームの内部の事や、介護される老人の気持ちなどを、その人だけにはよく話したんだって」

みきは言葉を切って荒井を見た。

「こんな話、ご迷惑ですね」

「どつぞ、続けてください。とても興味深く聞かせてもらってますから。実は私にも差し

迫った親の問題があるのですよ」

みきの表情が緩んだ。

「お客さんがいいと言ってくたさるから話すわね小父さん。とうさんは、わたしのことも詳しく聞いてもらってうれしいの」

ベッドの傍か食事どきか、老人の話に耳をかたむけている、介護士の姿が見えるようだ。

「『あんたは俺の末っ子に似ている』って、なんでも言ったんだって。勿体ないことを言うもんね。介護士さんは、わたしになんか少しも似てないのに、親ってバカなんだ」

「似ていたんだよ、みきちゃんに似ていたから、お父さんは懐かしかったのさ。だから、少しは役に立って上げようとしたんだろ」

優しい会話だな、と荒井は聞き入った。

「とうさんは、『女房が死んだときに、心を入れ換えれば子供たちに苦労かけずに済んだのに、とくに末っ子にはかわいそうな役をさせてしまった。でも、あれらの苦労があと少しになったらしいよ』そんなことを言ってから何日もたたなかつたんだって」

「やっぱりねえ。お父さんは、ちゃんと分かっていたんだよ」

「生きているうち、もう一度会いたかったのに、とうさんはわたしを呼んでくれなかった。薄情よねえ、小父さん」

みきは、その夜はじめて涙をこぼした。

身内だけの通夜の席に来てくれた介護士は、そのときの様子を物静かに話してくれた。

『お父さん、少しも苦しまずに亡くなりました。あの時も普通にお話なさっていたの。だんだん声が低くなったので聞き返したら、もう、お返事がなかったんです。驚きましたけれど、そばにいたことができて、本当によかったと思います。当直の医師にも、私の上司にもそう言われました』

ホームの老いた人は、突然の死を迎えることが多く、身内はその場に居合わせるが少ないという。みきの父は、わが子とよく似た介護士と言葉を交わしながら逝ったのだ。

『みきさんのお父さん、不慣れな私に頼ってくれて、いろんな事に自信を持たせてくれました。感謝してたんです。何かお礼をと考えていたのですけど間に合わなくて』

俯いたまま顔を上げずにいたみきの手を、介護士は強く握って目を潤ませた。

『生きていられるうちに何もして上げられなかったのが残念です。だから、代わりにあな

たが受け取ってくださいね。新しいものを上げられないけれど、大事に着ていましたし、クリーニングも済んでいますから』

コートは柔らかな紙に包まれて箱に納まっていた。

「父がお世話になった上、大切にできていらしたものを……」

『遠慮なさらないで。みきさんと私は、顔も背格好もそっくりだって、お父さんよく言うてらしたの。着てくだされば嬉しいわ。札幌も寒い所ですもの』

凍ての夜に帰ったその人は、みきの膝に暖かいものを残していった。

姉の家で、数えるほどの人数だけの通夜はわびしかったが、みきには思いがけない人との出会いがあった。

「めったにない話だよな。終わりの時、お父さんはいい人に看取ってもらってたんだ。あんたもほっとしているんだろ?」

あるじの声が湿っている。

ハンガーからコートをはずしながら、

「ありがたいと思っているの。とうさん、死ぬ時ひとりではなかったんだもの」
ふわっとコートを羽織って、いい表情でみきが笑った。

もしかすると、荒井がこの店へ通い続けたのは、今夜ここで、みきに会ったためだったのかもしれない。

荒井は通夜の客を想像してみた。計ったように、みきが着こなしているコートは、加奈のものだったのではないだろうか。

あの時、コートにイニシャルを入れたのだと、加奈は幸せそうに荒井に告げた。

イニシャルはそのままポケットに残っているだろうか。

みきに、コートの裏を見せてほしい、そして、その介護士の名を訊いてみたい。

荒井はそんな衝動を懸命にこらえていた。

別れを切り出した加奈は、あの時すでに売店を辞めていたのだった。

母親と暮らしていたアパートを、引き払ったことまでは知ったが、その後を突き止めることをしなかった荒井なのだ。

いまさら、何をと思っ。

だが、今夜、荒井はしきりに加奈が懐かしかった。

荒井の想いなど知らぬ気に、みきはコートの襟を、親にしてもらうように、あるじに直

してもらっている。

冬が終わらないうちに、またこの優しい娘に会えるだろうか。

ふいに、荒井は父の声が聴きたくなった。

父はもう寝ている時間だが、構わず、弾むような足取りで電話器に向かっていった。

もう躊躇いはなくなっている。

子供の頃、父は兄と荒井を戸外に連れ出し、よく遊んでくれたのだった。

老いた父を、遠慮しながらの暮らしに置いてはならなかった。

(とつさん、明日迎えに行くからね。役所の帰りだから、六時頃になるかもしれない。取りあえず着替えだけ用意しておいてくれればいい。それから、義姉さんに、俺の晩めし当てるにしようか。)

これでいいだろうか。